

没後30年を迎えて、  
いま我々はどんな時代に生きているのかを考える  
林典子さん、生田武志さんの講演



今年のAKIHIKOの会は三月二十九日(日)「没後三十年を迎えて、いま我々はどんな時代に生きているのかを考える」をテーマにフォトジャーナリストの林典子さんと野宿者ネットワークの生田武志さんをゲストスピーカーとしてお迎えし、東京都港区慶應義塾大学三田キャンパス南館2B42教室で十三時十五分から行いました。また会場では岡村昭彦の写真並びに岡村昭彦文庫展を同時開催し、三十年前の青山葬儀場での葬儀のビデオも上映しました。

昨年は大きな出来事として、東京都写真美術館で「岡村昭彦の写真・生きること死ぬことすべて」展が開催され、老若男女、また国籍もさまざまなひとたちが観覧に訪れました。入場者の総計は二万四千人を数え、口コミやツイッターを經由して何も知らずに岡村に出会った人たちも多かったようです。岡村の生きた時代を知らず、かつまたその時代への想像力を持つにはあまりに厳しい現実の中にある今の若い人たちに、どのようなメッセージを伝えたいのか。本年は、そうした時代の流れの中で、岡村の思想に共感をお持ちの

お二人に講演していただきました。

昨年『キルギスの誘拐結婚』『フォト・ドキュメントリー 人間の尊厳』を続けて上梓した写真家の林典子さんは、前日イラクから帰国したばかりということでしたが、スライドを使って女性の人権問題、差別の問題を熱く語ってくださいました。また、フリーランスのフォトジャーナリストである女性が危険地帯で取材することの難しさと可能性について語られ、岡村の時代との共通性や落差をも感じさせられるお話でした。性にまつわる共同体規制の問題と取り組む難しさに果敢に挑んでゆく姿には、女性に大きな期待を寄せた岡村の思いを感じました。

また生田武志さんは、大阪・釜ヶ崎の野宿者支援活動を長く続けられており、著書『「野宿者襲撃」論』など貧困と差別をテーマとした著書や発行・編集人として雑誌『フリーターズフリー』を刊行し、支援活動だけでなく、野宿者襲撃という犯罪を裏側からささえる社会の論理へと深く切り込む評論活動を行っています。

講演の中で生田さんは、野宿者襲撃という犯罪が少年たちによって行われていることを報告しながら、襲撃を行う少年達はハウスがあってもホームがない、ホームレスであり、その少年によってホームレスが襲撃されるのが野宿者襲撃であり、人種、階級、ジェンダーのいずれにおいてもヘイトクライム(「憎悪犯罪」)が発生している現代日本において、野宿者襲撃は階級間に発生するヘイトクライムだと指摘されました。コメントを寄せた高草木光一さんの言うように、野宿者襲撃と尊厳死法案には「生きるに値しないのち」があるという思想の蔓延があり、現代日本は「同情は連帯を拒否したときに生まれる」という岡村の言葉から遠く隔たっているのだという事実を深く考えさせる内容でした。当日の出席者は五十八名でした。(表紙写真・滝口忠雄氏撮影)

# 取材を通して みた女性の人権

はやし のりこ  
林 典子  
(フォト・ジャーナリスト)



はじめまして、林と申します。まずは自己紹介ということで、私がなぜ写真をはじめたのかというところからお話をしたいと思います。

私は大学生のときに国際紛争と平和構築という分野を専攻していましたので、将来は直接現場で支援活動をするNGOの職員を目指してい

ました。写真家を志していたわけでも、ジャーナリズムの世界に進みたいと思っていたわけでもないのですが、いまフォトジャーナリストとして取材活動している自分が、当時は全く想像できなかったと思います。

私が写真始めるきっかけになったのが、学生の時に教授と一緒に西アフリカのガンビア共和国というアフリカ大陸で一番小さな国を訪れたことです。ガンビアは面積が岐阜県と同じくらいに凄く小さな国なのですが、最初は現地の小学校でボランティア活動をしていました。しかし、せっかくガンビアまで来たのだから、ボランティア活動だけではなく、この国のことを知るために現地の新聞社で働きたいと思うようになりました。当時は写真の技術もなく、シヤッタースピードだとか絞りとか、そういったことも全くわからず、何でもいいから私にできる事があれば、ということでも『The POINT』紙という新聞社に足を運んで働かせてくださいとお願いしました。

日本の新聞社だったら、大学生が働かせてくださいと言ってくる、何を言っているんだとすぐに追い返されると思うんですが、ガンビアでは「じゃあ何ができますか」と聞かれて、英語で記事を書くぐらいの英語力に自信があったわけでもないけれどカメラは持っていたので「写

真だったら撮れますよ」と言ってしまったのがきっかけで、『The POINT』で写真を撮り始めることになりました。見て頂いたらわかるんですけど、モノクロの新聞でインクもベツトリしていて、技術は全く問われなくて、私としても写ってればそれで良いという感覚でした。最初は、技術的なことや写真の奥深さも分からないので、とにかくパチパチ写真を撮影し、掲載されたら嬉しいなという、気軽な気持ちで働いていました。しかし、ずっと現地のジャーナリストと一緒に活動しているうちに、実はガンビアは報道の自由や言論の自由が脅かされている国で、大統領を批判した記者が行方不明になったり殺されてしまったり、そういうことが日常的に起きている国だということを知ることになり、この国のジャーナリストが置かれている状況の深刻さを理解するようになりました。ここ見て頂くと「for freedom and democracy (自由と民主主義の為に)」と書いてあり、右端には男性の顔写真が載っているんですが、この顔写真の男性は新聞社の元編集長で、大統領を批判するコラムを書き続けたことで銃殺されてしまいました。「誰がデイダ・ハイドラを殺したのか」と小さく書いてあります。この新聞の一面には毎日必ず彼の写真が印刷されています。

ガンビアという日本ではよくザンビアと聞

違えられてしまうことが多いのですが、ガンビアは誰も知らないような小さな国で、石油もなく、観光で行くような国でもなく日本大使館もありません。こういう小さな国で、言論の自由がない厳しい環境の中取材活動をしているジャーナリストたちと一緒に行動していく過程で、私は一度日本に帰れば、例えジャーナリストではなくても、ガンビアで見たことを自由に話せますし、Facebook やブログに意見を書いたりすることができるとても恵まれていることなのだという事に気付かされました。その時に始めて、ガンビアのジャーナリストのように日本でなかなか知られる機会のない地域で生きている人たちのことを伝える仕事をしたと思うようになりました。そして、卒業してからはフォトジャーナリストとして活動を始めるようになりました。

今日は「女性の人權」ということで、パキスタンとキルギスと、最近、取材をしてきたイラクの女性たちのお話をしたいと思います。パキスタンではさまざまな女性の問題があるので、最近ではマララさんがノーベル賞を受賞しましたように女性の教育の問題もあります。数字すら読めない女性も多いんですね。それから男性からの暴力という問題もあるんで

すが、私は硫酸の被害にあった女性たちを取材しました。

パキスタンでは一年間で百五十人から三百人の女性たちが男性から硫酸を顔にかけられる被害が報告されています。私が取材したのは赤い印がついているところなのですが、アフガニスタンとの国境あたりでは事件がまったく報告されないケースもあり、被害にあっても病院に行くことも、警察に通報することもできないでいる女性も多いために、実際の被害者数は三百人以上ではないかと現地のNGO関係者は話していました。

写真の彼女も被害者の一人です。男性が女性に硫酸をかける主な理由としては、例えば女性にプロポーズを断られた腹いせとか、家庭内暴力の延長で硫酸をかける、などがあって、彼女の場合も結婚四カ月目に夫から硫酸をかけられています。

日本では硫酸は簡単に手に入りませんが、パキスタンでは農薬の一部に使われています。パキスタンは綿産業が盛んなため、綿の生産地の農村地帯では硫酸がそこら中で売られていて、約百円出せば五百ミリリットルぐらいのペットボトルに入った硫酸を簡単に購入できてしまうという現状があります。

彼女はセイダという女性で硫酸をかけられた

とき結婚四カ月目でした。もともと夫からの家庭内暴力に苦しんでいたのですが、二〇〇八年のある夜、寝ているときに突然夫に硫酸をかけられました。私は彼女と三カ月間一緒に生活をして撮影をしました。硫酸の被害にあつたら皮膚の移植手術を受けるのですが、この写真の彼女は七回目の手術をしているところです。左足の太ももの皮膚を首に移植して、移植した皮膚を繋ぎとめていた金具を抜いています。

硫酸をかけられる前の彼女の写真は一枚だけ残っているので見せてもらったのですけれども、とても綺麗な顔でした。硫酸の被害にあつた女性はもともと綺麗な女性が多いんですね。その綺麗な顔を失わせるために男性は硫酸をかけるんですけれども、このような顔になってしまつて恥ずかしいという気持ちが強いため、日中外に出るときには、顔をこういうふうに隠して外出しています。

これはセイダとセイダの妹のイクラという女の子。手術が終わって家に戻ってきて寛いでいるときに妹がお姉さんにキスをしているところです。

この取材には三カ月かかりました。さっき「シヤッター以前」というお話がありました。私もシヤッターを切る、写真を撮る時間というのは取材中のごくわずかで、写真を撮るまでの間



のコミュニケーションが凄く大事です。静かな部屋の中で写真を撮るときにはバシバシ、バシバシ音が鳴ります。そういう音が鳴ってもカメラを見なくなる、出来るだけ私の方を気にしなくなるまで信頼関係を作ったうえで写真を撮りたいと思っています。セイダとの三カ月の取材期間のうち最初の一週間はほとんど写真は撮らないで一緒に遊んだりテレビをみたり、一緒にビーズをつくったりとか、そういうことをして私の存在を気にしなくなるような状態を作ってからシャッターを切る回数を増やしていくようにしました。この写真の左側がセイダで、右側が彼女の看護師の女性なのですが、手術後のセイダの様子を見に家に訪れて来たところです。

この写真は被害直後の女性の写真なのですが、硫酸の被害者のほとんどが最初は自殺願望が強い方が多いです。私も硫酸の被害にあつて病院へ運ばれた直後の女性と話したことがあるんですけど、こんな顔になった自分を受け入れられないと言って、「もう死にたい」という言葉しか発していなかったんですが、カウンセリングや治療を繰り返していくことで、少しずつ前向きになっていく女性たちが多いのですが、彼女は二十年前に夫に硫酸をかけられたんですが、今はこのように町の美容院で、口紅を塗ってます。彼女はビューティシャンを目指し店が開く前の美容院で、身支度を整えているところです。

硫酸の被害はパキスタンだけではなくて、アフガニスタンやインド、バングラディシュや東アフリカでも報告されています。ただバングラディシュでは硫酸の売買の規制が厳しくなったので、被害がものすごく減ったんですが、パキスタンではそういった方向にはなっていないくて、硫酸の被害者が増えてきていると聞いています。

次はキルギスです。私は二〇一二年にキルギスの取材をしました。キルギスは東隣が中国で、北がカザフスタンで、それからタジキスタンとパキスタンに囲まれた旧ソビエトの共和国です。

面積は日本の約半分で、人口が五百万人ぐらいです。

私はキルギスで多くの日本人バックパッカーにも出会ったんですけども、治安が安定していて凄く平和な国です。私が取材したテーマがたまたま「誘拐結婚」という、女性を無理やり連れ去って結婚させる、という取材内容だったので、キルギスが凄く怖いというイメージを持つ方が多くいるようなんですけども、実際は凄く安全で旅行するのもお勧めできる魅力的な国です。

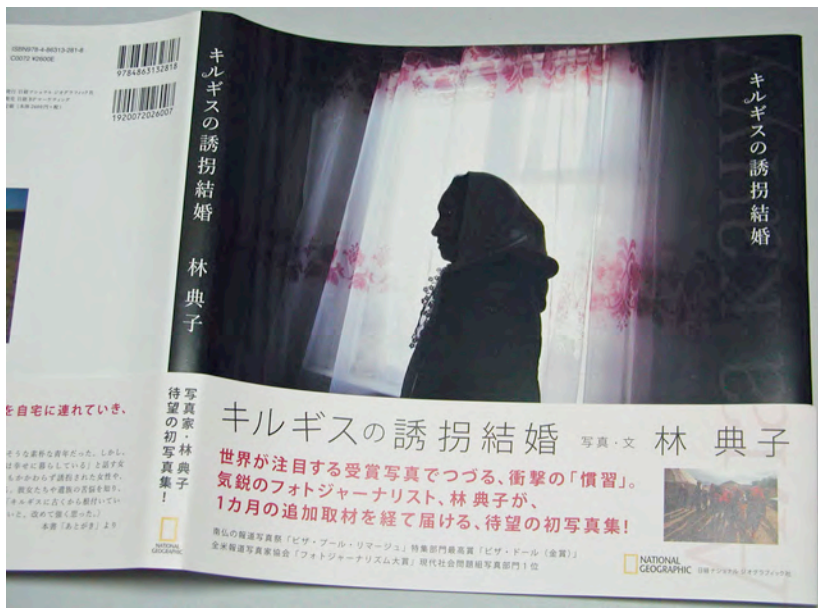
これは、私が住んでいた家の目の前の風景なのですが、凄くのどかなところです。これから小学校に行く準備をしている女の子たちです。フランスのウエイトレスみたいな恰好ですけども、これが小学校の制服です。

日本語で「誘拐結婚」と訳すとすごく衝撃的に聞こえてしまうんですが、キルギス語では「アラチュー」といって、直訳では「奪って去る」という意味です。一年間で何人の女性たちが誘拐されているかという国の統計はないんですが、キルギスで誘拐結婚の問題に取り組んでいるNGOの方に聞きましたら、年間一万人ぐらいの女性たちが男性に連れ去られて結婚をさせられていると話していました。

この女性はフリーダという大学生の女の子

なんですけれども、婚約者がいるにもかかわらず、たまたま彼女に一目惚れをした男性に車に押し込められて誘拐され、家に連れて来られてしまいました。男性側の親族の女性たちが彼女の腕を掴んでこれから家に連れて行くところとして

いるところですが、真ん中にいる男性がフリーダを誘拐したのですが、こうやって



「私はあなたとは結婚したくない」と一生懸命拒否をしているフリーダに対し男性は、「いや僕と結婚してほしい」と言い続けていて、「私はもう婚約者がいるので結婚しない」と十時間ぐらいつつこのような状態が続きました。

そして夜中の一時過ぎ、妹が誘拐されたことを聞きつけたお兄さんが家にきて妹を救出しようとしているところなのですが、「妹がここに残りたいなら残ればいい。でも、こういうふう泣いているから僕は連れて帰る」と言って、緊迫した状態が続いて、結局は家に帰ってききました。

これはさっきの写真から一年半後に撮った写真なんですけれども、その後彼女はもとの婚約者と結婚して、子供が生まれて今は幸せに暮らしています。彼女の場合は結局、家に帰ったんですが、ほとんどの女性たちは結婚を受け入れていません。誘拐された女性たちは、たとえ相手のことをほとんど知らなくても、好きではなくても結婚を受け入れてしまっています。

その理由には、キルギスでは一度女性が男性の家に入ると純潔が失われてしまったと思われるので、実家に帰っても悪い噂がひろがってしまったりするんですね。そうすると親にも迷惑をかけるので、諦めて結婚を受け入れたという女性たちが多くいました。

実際、彼女の場合もそうで、私はこの翌日に車を走って行ったんですけど、結局、彼女はお兄さんと一緒に実家に帰っていったので、彼女に対する悪い噂がひろまっていて、実は妊娠していたんだとか、色んな男の人たちと付き合ってきたとか、そういう噂が広まっていて驚きました。

彼女はディナラという女性で、十日前に市場でたまたま出会った男性に誘拐されて家に連れて来られて泣いているところです。彼女は結局、誘拐されて五時間後に結婚を受け入れました。実家の両親にどうしようか迷っていると電話をしたら、家に帰ってくるのは恥だからそこに残っていなさいと言われられて結婚を受け入れることにしました。

これは結婚式の日、その次の日ですね。これから食事を出す羊を殺すために運んでいるディナの新しい夫のアフマトという男性です。これが二人の結婚式なんですけれども、アフマトは高校の先生で、キルギスでは女性を無理やり、合意なく誘拐して結婚させるこのやり方は違法で、もし誘拐の最中に警察に通報されたら男性が捕まるんですが、もちろんアフマトもそれを知っていて、アフマトは高校の先生で生徒の見本にならないといけないので、僕がしようとしていることは正しいのか、とずっと

迷ってしまったらしいんですね。迷った挙句、それでも結婚したいと、結局は誘拐にふみきつたと話していました。

これは結婚の三日後、夜、ディナラがお皿洗いをしているときに、彼女に近づいてキスをしている夫アフマツトとの二人の様子です。これは結婚式から一週間後ですね。彼女が台所でこういうふうに見ているところ。誘拐結婚は、女性を無理やり暴力的に連れて行く現場の写真ばかりが強調されやすいんですけど、あの写真はキルギスで取材を始めて二カ月後に、たまたま現場に遭遇して撮ったものです。その前は誘拐結婚で結婚をした夫婦のポートレート写真を撮りながら、誘拐結婚というのはどういうものかを知るためにひたすら話を聞いている二カ月間だったのですが、その時にすごく不思議だったのが、何で嫌いな人に誘拐されて結婚を受け入れるんだらうっていうことだったんですね。それをキルギスでは恥とされている、と言うんですけれども、結婚を受け入れたその直後、どういう新婚生活がスタートするのが不思議だったのも、もし誘拐結婚を目的の当たり前にすることがあったときには、その女性と一緒に生活をして、何で結婚したのか、その後どう家庭生活に馴染んでいくのかを私自身がちゃんと見る必要があるかと思っていました。彼女の取材を始

めたのは、キルギスでの取材を始めて四カ月後のことでした。

最初にキルギスに滞在したのは五カ月間でしたが、四カ月目に彼女が誘拐されているところを見て、そのあと彼女が結婚を受け入れたので、彼女が嫁いだ家に二週間、泊めてもらいながら取材をしました。最初はもちろん写真撮るのは凄く難しく、結婚式みたいな、その日しかない写真は撮らなければいけないんですけど、それ以外の日常生活はほとんど撮らないで、近くに一緒に座っているだけとか、そういう時間が毎日流れていて、結婚生活が始まって四日目ぐらいからやっと写真を撮るようになりました。これはキッチンで彼女が物思いにふけっているところです。私の通訳は日本語、キルギス語とロシア語が話せる男性だったんですけど、間に男の人をいれてしまうと、本当に聞きたいことが聞き取れないということがよくあります。パキスタンやキルギスでもそうだったんですけど、特にイスラム圏の取材では女性たちは男性を間に入れるとほとんど本音を言いません。特にセンシティブな取材になればなるほどです。彼女のときは、私は日本語とロシア語の辞書を二つ持っていたので、夜みんなが寝静まつてから、その辞書を開きながら二人で会話をしました。それで彼女がどういう気持ちなのかを

聞き出すことができたんですけど。

彼女はもともとトルコ語がうまいんです。大学でも成績が優秀で、当時もまだ大学生でした。実はこの一年後にトルコの大学、トルコのアンカラでコンピューター関連の仕事の就職先が決まっていた、キャリア志向が高くて、将来は都会のアパートに住むのが夢だったという話をしてくれたんですけど、私が結婚式の写真を撮っているときには、彼女がまさかそんな将来を思い描いていたことは知らないでいて、凄く複雑な気持ちになりました。

ただ彼女はもう自分はこの嫁ぐことを決めたので、キルギスでは女性が男性の家に入つてそこから逃げるといふのは絶対に許されないし、両親にも結婚前に誘拐されてしまつてどうしようかと相談をしたら、そこに残りなさいと言われていたので、選択肢がなくなつたつて言うんですね。私が彼女の家庭の問題、価値観の問題に介入することはできないので、とにかく幸せになつてほしいつていう気持ちしかなかったんですけど、彼女は取材の最後に、私は絶対ここで幸せになります、と話してくれました。

彼女とはその後も連絡を取っていたのですが、一年四カ月後に妊娠をしてもうすぐ子供が産まれるというので、私はキルギスに戻りました。これが妊娠九カ月で臨月の彼女の写真です。



昨年(2015年)の二月八日、ソチオリンピックの開会式がちょうど終わった時に陣痛が来て、その時私は彼女の家で、テレビで開会式を見ていたんですけど、一緒に病院へ向かいました。この写真では、時計の針が一時三十一分ですね。二月八日の一時三十一分に女の子が生まれました。これは子どもが生まれて家に帰ってきた後の

ダイナラの写真です。いま彼女は凄く幸せに暮らしていて、きっかけはたまたま誘拐結婚ではあったのですが、夫は真面目でお酒も飲まないし、煙草も吸わないし、無駄使いもしないし、家事も手伝ってくれて凄く私はラッキーだったというふうに話していました。ただ、もしも娘が誘拐されたら絶対に許さない。絶対にそれは受け入れられないと話していたのをきいて、やっぱり誘拐結婚は人権侵害だと、私も改めて思いました。

その私が誘拐結婚について日本で発表すると、他の国の文化を日本人の価値観で判断するとか、いけないと決めつけるのはおかしいのではないかとという意見をよく聞きました。キルギスでも誘拐結婚は違法であって伝統ではなく、これがキルギスの伝統だと思いきこんでいるキルギス人も多いし、日本の人もそういう意見を持っている人が多いんですけども。ソビエト時代以前のキルギス、つまりキルギスがまだ遊牧時代の頃には今のようないくつかの女性を合意なく連れ去る誘拐結婚はほとんどありませんでした。今のような暴力的な誘拐結婚が増えたのは今から六十年ぐらい前からです。女性の合意ないアラカチュューは、もちろん違法ではあるのですが、加害者の男性が逮捕されるケースはほとんどありません。この写真の真ん中にいる男性がある女性を誘拐し

て、その数日後に女性が自殺をしてみました。それがきっかけで逮捕された男性です。これは裁判所の中の様子です。

彼女はウルスという女性なんですけれども、もともと婚約者がいたにも関わらず、この男性に誘拐をされ、さらにレイプをされ、無理やり結婚をさせられ、その数日後に自殺をしました。これは写真を持っているのはお母さんで、この写真は裁判の後に遺族と一緒にウルスのお墓に行った様子です。右端で座って泣いているのがウルスのお母さんで、真ん中がお姉さんで、左端にいるのがウルスの婚約者だった男性です。

これからはイラクの写真を見て頂きたいと思います。二日前にイラクの取材から帰ってきたところなので、まだ写真を編集してなくて、撮影した写真の中から数枚選んで持ってきたためストーリーにはまだなっていません。今回はイラクのヤジディ教徒の女性たちの取材をしました。

ヤジディ教というのは、イラクに約五十万人いると言われている少数民族です。ヤジディ教徒は日本ではほとんど知られていませんが、イラク北西部に多く居住し、もともとイスラム教徒ではなくユダヤ教とかキリスト教、イスラム教徒、古代のペルシャの新興宗教などが入り混

じった宗教です。イスラム教のいわゆる過激派と言われている人たちからは邪悪の宗教だとされ、これまでも何度も虐殺の対象になっていきます。昨年八月にイスラム国がヤジディ教徒が住んでいる、シリアとイラクの国境にあるシンジャル山の周辺の街や村を攻撃しました。最低でも五千人のヤジディ教徒が殺されたといいますが、実際にそれ以上のヤジディ教徒たちが殺されていると思っています。イスラム国がシンジャル山を攻撃した際、イスラム教への改宗を拒んだ男性たちをその場で殺害しました。そして女性たちや子供たちを誘拐して、イラクやシリア各地へ送り、強制結婚やレイプを繰り返していました。

彼女は二十三歳の女性です。今回の取材ではまだ家族がイスラム国に捕まっている女性たちがほとんどだったので、顔が誰かがはっきりわからないように写真を撮らなければいけない女性が多かったです。この撮影では、ヤジディ教の女性たちがつけている白いスカーフをカメラの前につけて撮影をする、という方法でポートレートを撮りました。この女性の他にも十人ぐらいの女性を同じような撮影方法で撮りました。彼女はコウチョという名の村の出身です。もともと五一七人の村人がいる村なんですが、村



にいて生き残った男性はわずか十六人でした。そのうち九人はイスラム国が侵攻してきたときにたまたまその村にいなかった人たちで、あとは銃弾を逃れて生き残った男性です。

彼女は顔を出してもいいということだったので、三日間だけ一緒に生活をしながら取材をしたんですが、彼女は二十一歳の母親で、抱いているのは一歳の息子です。イスラム国に捕まって三カ月後に息子と娘を抱いて逃げてきました。

多くの女性たちが、運よく逃げて戻ることができたとしても精神的なダメージが深く、車の音を聞くと子どもたちも怖くて逃げてしまったり、怖くて叫んだりとか、そういうことが起きるようになったと話していました。

彼女は十二歳の女の子です。イラクのドホークという町の難民キャンプで、親戚のお姉さんと一緒に暮らしています。彼女も、両親がまだ捕まったままなので遠くから写真を撮りました。ヤジディ教徒の女性たちのカウンセラーを担当している医師の方に話を聞いたのですが、十二歳以上の独身の女性たちは九九%、レイプの被害を受けていると話していました。

これがいまのシンジャル山の難民キャンプの様子です。クルド自治区の他の地域のキャンプでは、国連や各国のNGOによる支援がある程度行き届いているのですが、このシンジャル山に残された難民はほとんど支援を受けず生活しています。電気も食料もほとんどないなかで生活している状況を日本で伝えてほしいと言われました。

最近、大学で話をする機会がよくあるので、ジャーナリズムを勉強している学生に「何でこういう地域に、誰からも依頼されていないのに行くんですか」という質問を受けます。記



者の方からも同じ質問を受けることが多くあります。キルギスの誘拐結婚については、もともと学生の時にキルギスに誘拐結婚というのがあつたのを知り、関心を持ったのがきっかけです。知りたいという気持ちが少しずつ増えてきて、この仕事をするようになってキルギスに取材に行ったのですが、実際に行ってみると、自分がどれだけ現地のことかわかっていないかを実感して、具体的にこういふふうには取材をしなければいけない、こういうふうには動かないと何もわからないうのを感じるようになります。

取材を少しずつこなしていけばいくほど、どういふところを具体的に取材してどういふ人に話を聞かなければいけないかが、だんだん分つてくるのですが、そういうやり方で取材を進めていくと、あつという間に数週間とか時間がかかってしまいます。さっきのヤジディ教徒の取材でも、使命感があつてやつていふのか、とよく言われるんですけど、誰かから指示されて行つていふわけでもないの、使命感があると言つたらきれいごとを言つていふように聞こえてしまうと思ふんです。ただ取材中に一緒に生活をしていふ人たちがどういふ苦しみを持ちながら生きていふのかを、私も一緒に生活していふと、じわりじわりと感じるようになります。そして、取材相手の方から、自分はこのような想

いを持つて毎日生きていふから是非これを伝えてほしいと直接言われることが多くあります。今回のイラクの取材に関しても「私たちの苦しみを伝えてください」と直接言われました。そうすると、ちゃんと取材をしなければいけないという責任感を感じるようになります。

私の場合はフリーランスなので、中途半端に取材をすると、発表ができないのが現状です。特に日本の場合には、フリーランスのフォトジャーナリストが活動に専念できる場が凄く限られています。中途半端に取材をすると発表できないことが私はわかつていふので、せつかく私を受け入れてくれて私を信用してくれて、写真を撮らせてくれていふんだから、ちゃんと発表できるような写真を撮らなければいけないし、もし発表する時に長い記事も書けるよう深く取材をしなければいけない、という気持ちで取材をしています。

イラクやシリアなど情勢が不安定な国で取材をするジャーナリストに対する批判が日本ではとても多い印象を受けていふます。私がイラクで取材をしていふときにも海外の女性ジャーナリストやカメラマンが当然、当たり前のようにたくさんいました。私がイラクで滞在した家はアメリカ人の友人のフォトジャーナリストの家なのですが、そこはル・モンド紙の記者やイギリ

ス人のカメラマンなどが集まる家でした。外国のフリーランスだけではなく大手メディアの記者たちが当たり前のように取材をしていふ地域で、日本のジャーナリストが取材をしていふと日本国内で批判を受けるといふのは凄く残念だと思ひます。一〇〇%安全が保証されていふ取材や国はどこにもありません 伝えて欲しいという方がいて、私が伝えたいという想ひがある限り、取材を今後も続けていふたいと思ひます。ありがとうございました。

## 【略歴】

イギリスのフォト・エージェント、Panos Pictures 所属。大学時代に西アフリカのガンビア共和国新聞社「The Post」紙で写真を撮り始める。「ユースにならない人々の物語」を国内外で取材。2012年 DASH 国際フォトジャーナリズム大賞、2013年フランス世界報道写真祭「Visa Pour L'Image」報道写真特集部門「Visa d'Or」金賞、2014年 ZDPA 全米報道写真家協会現代社会問題組写真部門1位など受賞。ワシントンポスト紙、デア・シュピーゲル誌、ル・モンド紙、米ニューズウィーク、マリ・クレール誌（イギリス版）、DAYS JAPAN、ナショナル ジオグラフィック日本版など国内外のメディアで発表。著書に「フォト・ドキュメンタリー 人間の尊厳 いま、この世界の片隅で」（若波新書）、写真集「キルギスの誘拐結婚」（日経ナショナル ジオグラフィック社）など。

## 佐藤純子(昭彦長女)さんの挨拶



第三十回AKIHIKOの会にご参加の皆さん、私、今回は本当に久しぶりにAKIHIKOの会に参加させていただきました。皆さんに直接お会いできて嬉しく思っています。先ほど父の葬儀のビデオ映像を見ておりました。父は本当に若くして逝ってしまったのだと思いました。映像の中の私自身も、そして何人かのここに居られる皆さんも、とてもお若いのです。葬儀の際、私は父の蒔いた種が何処かで沢山芽がでますようにと挨拶をさせていただきましたが、

今こうしていろいろな所で、いろいろな方の中に育っていることを嬉しく思います。

最近、乱暴な言動、物事が多い中、去年は東京都写真美術館での写真展開催に向けて、本当に丁寧に丁寧に準備を進めていただきました。

開催中は大勢の方が来場してくださいました。私の知人の中には、一度ならず何度も足を運んだ友人もおりました。

写真展は圧巻でした。ありがとうございました。

今年でベトナム戦争終結から四十年、石川文洋さんは「ベトナム戦争終結四十周年四月三十日の記念式典へ行く予定です。日本におけるベトナム報道の先駆者として大きな功績を残したと思っています」と、父についておっしゃってくださいました。

小川卓さんからは「岡村さんがご存命であれば八十六歳のはず、『小川には哲学がない!』と説教を賜っていることでしょう。懐かしい声が聞こえるようです」と、年賀状をいただきました。

最近心に残った言葉があります。

「結果自然成」

禅語だそうです。

「結果は自らの努力と不思議な(宇宙的)働きかけによって成り立つ」という意味です。



今此処に立つてこの三十年間の時間の流れを感じています。

本日はありがとうございました。

二〇一五年三月二十九日 慶応義塾大学にて

# ヘイトクライムとしての野宿者襲撃

いくた 生田 武志  
たけし  
(野宿者ネットワーク)



みなさんはじめまして、生田といいます。釜ヶ崎で野宿者や日雇い労働者の支援活動をしています。釜ヶ崎は大阪市にあって、環状線で天王寺とか新今宮駅の近くで、大きな町じゃないんですけど、日本で野宿している人が一番密集しています。

今でも毎晩五百人ぐらい野宿しているところですよ。

僕が初めて釜ヶ崎に行ったのは一九八六年でした。テレビを見ていたら、釜ヶ崎の冬の夜回りの様子を映していました。真冬でも釜ヶ崎の近辺では毛布もなしで寝ている人がゴロゴロといっぱいいます。当時、千人ぐらいが野宿していました。去年は九十三歳の人が野宿していました。その人は戦争へ行って生還したんですけど、故郷に帰ったら自分のお墓が立ってて戦死扱いになっていました。でも生きるのが最優先なんですって働いてきたんですね。年をとって体力がなくなると役所に相談に行ったら、役所の人は「あなた死んでます」と言って、相手にしてくれなかった。その人は九十歳超えてから、通天閣の下あたりでリヤカーで段ボール集めて、それでパン買ったり、路上でカセットガスでラーメン作ったりしていました。僕らが「生活保護でアパートに入れるから、そういうのしましょうよ」って声かけたんですが、「いや、まだ頑張れますから野宿続けます」と言って三年ぐらい野宿してました。ただ去年になってバツタリ倒れちゃったんです。周りで野宿やっていると人が教えてくれたんですが、それから帰ってこないのか、入院したのか、亡くなったのか、元気でいるのか、わからなくて心配しているところですよ。

体の悪い人も多いですね。釜ヶ崎の結核罹患率は南アフリカやカンボジアより二倍近く高く、「世界最悪の結核感染地」と数年前に毎日新聞に報道されました。結核は不安定な生活や栄養不足が原因です。他にもがんの手術を一週間前にやって退院したばかりとか、腰を悪くして殆ど歩けない人とかがいます。そういう人に声をかけて、一緒に病院行ったり、役所に行って生活保護とってアパート入ってもらったりといった活動をしています。

当時も今も野宿してる人の多くが、アルミ缶とか段ボール集めて生活しています。アルミ缶っていま一個で二円ぐらい。千個で二千円なんですけど、あちこちから集めてきて十時間かかっても千個集まるかどうか。時給にすると百五十円ぐらいです。

段ボールはもっと割が悪くて、いま紙の値段がキロ七円です。一日かかって百キロ集めても七百元なので、時給七十円です。とんでもない低賃金の重労働です。夏は暑く、冬は寒く。それを見ると、世の中を器用にわたっていけない、正直な人が野宿しているのではないかという気がします。

僕は大学三年の四月から釜ヶ崎に通い始め、卒業して釜ヶ崎に残って、同じ生活しないとわからないこともあるだろうと日雇い労働を始めました。今はいろんなアルバイトをしながら野宿者ネットワークを中心に活動しています。

釜ヶ崎の日雇い労働者は、朝の三時、四時に起



きて「あいりん総合センター」に行きます。そこに人材派遣業者、手配師の車が多い時は百台ほど止まっていて、車には業者の名前と「神戸市内九千円」と書いたプラカードが立ってます。労働者はそこで手配師に「行きます」とか立候補して、手配師は「あんた駄目」とか「じゃああんた車乗って」と労働者を選別します。若くて健康な人が車に乗って、年とつたり体弱そうだなっていう

人はハネられます。仕事につけなかった人はブラブラするしかない。

建築土木は、晴れてると仕事があるけど、雨が続きと外の現場は止まってしまふ。建築会社は仕事が多い時には釜ヶ崎から労働者を引っ張ってくる。仕事がない時には車つけるのをやめます。当然ですが、仕事がないと収入がなくなり、貯金がなくなり、家賃が払えなくなり、路上生活になります。このために釜ヶ崎は、日本で一番日雇いの人が多くて、野宿者が多い街になりました。一九八六年には釜ヶ崎では年間五百人が路上で死んでいる、と言われていました。餓死、病死などの路上死です。十年前でも大阪市だけで年間二百人、つまり毎日のように野宿の人が死んでいたと新聞記事にあります。

釜ヶ崎では「国境なき医師団」が医療活動を行っています。先進国での活動は異例で、日本は本格的な支援の対象国です。彼らによれば、大阪市の野宿者の健康状態は海外の難民キャンプのかなり悪い方に相当するそうです。大阪という大都会のど真ん中で、第三世界並みの健康状態や貧困が広がっていることになりました。

僕がこれまで活動してきた中での変化は、一つは野宿者の数が増えたということです。一九八六年には全国で千人くらいだったのが、その後、一番多いときには四万人が野宿するようになりました。

た。七年前、年越し派遣村直前の頃です。その後は生活保護が受けやすくなって今では二万人切つてると思います。地域も広がって、北海道から沖縄まですべての都道府県で野宿があります。これは釜ヶ崎の全国化といえます。

いま、労働者のほぼ四割がパート、派遣、アルバイトなどの非正規です。フリーターは何百万人です。フリーターは、多業種の日雇い労働者です。いつクビになるかわからない、怪我や病気をしたら一貫の終わり、年をとったら給料が上がるどころか、多分仕事がなくなっちゃう。日雇い労働者そっくりです。こうして、釜ヶ崎の日雇い労働者と同じパターンで野宿になる人が全国で増えました。労働者の四割が非正規ってことは、日本の三分の一が釜ヶ崎になっっているようなものです。

もうひとつの変化は、野宿の女性の増加と若年化。二十八年前には女性の野宿者はほとんどいなかったんですが、数年前の民間調査では、野宿者の七%が女性です。女の人の多くは隠れて寝ています。僕が聞いた人は、大阪の商店街のマンションの非常階段の踊り場で寝てます、っていう女性がいきました。ただそういうところで寝るといくら夜回りしても絶対見つからないです。あとビルの隙間に毛布詰め込んで寝てました、夜は繁華街歩き回って、昼は公園のベンチで寝てました、と

が目立たないように野宿しているようです。

女性が野宿になる原因は、大きくは二つあって、一つは失業です。そしてもう一つの原因、これは世界共通ですが、聞いてみようかな。どうですか。女性が野宿になる原因。

会場 「離婚」

会場 「一人身」

会場 「支えてくれる家族がない」

ありがとうございます。もつと直接的な原因があつて、ドメスティック・バイオレンスです。夫の暴力が酷く、女性は我慢して、もう死ぬと思つて逃げだします。自分の実家とか兄弟の家だと連れ戻されたりするんで、お金持てるだけ持つて子どもの手を引いて逃げ出します。最初はホテルに泊まつて、お金がなくなつてくると二十四時間のレストランとかに親子で朝まで座つていて、いよいよお金が無くなると、公園のベンチでしょんぼり座つていて、僕らと出会う、というパターンです。

実際、四十代のお母さんと十代の子どもとか、三十代のお母さんと五歳の子どもといった野宿に出会うことがあります。DVシエルターに紹介したりしてなんとか解決しています。この場合、子どもも野宿していることになります。僕が知っていますから、全国で結構な数になると思います。



お父さんが失業して、家族が車で野宿している事例もありました。子どもたちは車から小学校に通つてただけで、学校の先生はそれに一カ月以上気づかなかつた。子どもたちの間では噂になつたけど、子どもたちは親にも先生にも一切言わなかつた。それで発見が遅れたんです。最終的には地域の福祉に繋いでなんとかなつたんですが、こういう親子もろとも野宿は今後も増えてくと思

います。

それから若年化です。が、いま新規で野宿になる人の三十%が三十代以下です。僕が持つている野宿者ネットワークの携帯にも電話がかかつてきます。大学院を出てから研究所に勤務したけどクビになつた二十九歳の女性とか、元旦に二十代の派遣の夫婦から相談があつたこともあります。夫婦でネットカフェ泊まつて、それから大晦日に大阪駅のトイレで年越したそうです。会つと、二人とも疲れ切つた顔をして、女性は妊娠している状態でした。

若い人には僕はいつても「実家に帰るのは無理なんですか」と聞きます。若くて野宿になる人の家庭環境は大ざっぱに言うと二つあります。まずはひとり親家庭、母子家庭。母子家庭で四人の兄弟がいて、しかも生活保護を受けているとか、母子家庭で再婚した義理の父親との関係が非常に悪いとか。たまに相談に来た人の親と電話で話をすることがあるんですけど、「あの子には決して帰つてきてほしくありません。あの子には死ねと伝えてください」と言う親がいたりします。何があつたんだろうと思うけど。詳しく話を聞いたら、借金とか、家出とかいろんな事情があつたりします。

それから若い人の野宿の理由は、虐待です。例えば、「私の家には、いまお母さんとお兄さんが

いるんですが、お母さんは覚せい剤依存で、お兄ちゃんの殴る蹴るの暴力が激しく、家にはとても帰れません」とか。基本的に若者は貧困な人が多いです。フリーターの平均年収が百六万円と言われてますが、普通だったら一人暮らしなんかできないですよ。実際、欧米のホームレス問題の主流は若者で、日本みたいにおっちゃちゃんが野宿してるとケースはそんなに多くない。背景には若者の長期失業や、家庭環境の崩壊があります。そういう点で日本と似てますが、日本の若者は、生活に困っても実家に住んでいたり、親からの仕送りがあってなんとかなってると思うんです。その中で、実家自体が貧乏だったり、暴力があったりして、親を頼ることができない若者が続々と野宿になっっている状態です。あとは最近、若者の野宿の背景の一つは奨学金です。奨学金は正社員とか公務員になれば返していけるんですが、就職できなかったり、就職しても親の介護で辞めたりすると再就職が難しく、たちまち返済に困って生活困窮に陥るパターンが多くて、これから大きな課題になっていくんじゃないかと思っています。

これから今日の問題の襲撃問題についてお話しします。野宿の現場に関わっていると、色んな現場に出会うんですが、特に大きな問題の一つが襲撃問題です。

野宿の人たちはしょっちゅう襲われています。これ殴る蹴るから始まって、エアガンで撃ちまくられるとか、あと石を投げられるとか、あと寝るところに消火器をブシューっと段ボールハウスに投げ込まれるとか、打ち上げ花火を水平にして寝てるところに打ち込まれるとか。僕が聞いた中では、寝たら突然目玉をナイフでグサツと刺された人がいました。その人はすぐ救急車で運ばれ



て、何時間もかかる大手術したんですよ。その人、目は助かったんですけど、殆ど見えなくなっしまいました。その人は何でこんなことやられるか全く身に覚えがありませんって言っていました。だいたいみんな身に覚えがないんです。いきなりやってくるので。よく「人種・階級・ジェンダー」と並べられますが、それぞれに襲撃事件が起こっています。人種問題による襲撃は海外で多いし、日本でもヘイトスピーチが問題になっています。ジェンダーについては女性へのDV、あるいは性的少数者への襲撃が問題になります。そして階級問題からくる野宿者襲撃ですが、これは世界共通で起こっています。僕も一九八六年に関わってから数えきれないぐらいの襲撃事件を見ました。特に印象的だったのを今回二つお話しします。資料を読みます。

二〇〇一年七月十九日。朝四時ごろ日本橋の路上で野宿者への放火。本人の話。「アルミ缶を集めている。仰向けで寝ていて、気づいたら股が火に包まれて燃えていた。「ヒヤハハハ」という高い笑い声が聞こえた。とにかく燃えているズボンとパンツを脱ぎ捨てた。担当医師によると、陰部、両下肢の火傷、全身の一〇%。大体二度の火傷だが、一〇%のうち二%、(手のひら二枚分ほどの範囲)は三度、つまり重症。

大阪の日本橋でアルミ缶集めてる人が疲れて寝てたんですね。朝の四時ごろ気が付いたら、下半身が燃え上がって、びっくり仰天して、こんなして（ひびきをたたく）火を消そうとしたんですね。だけど消えない。ガソリンとかぶっかけて火をつけてるので、ちょっとやさそつとじゃ消えないです。しばらくのたうち回っていたんですが、ズボンとパンツを両方脱ぎ捨てました。すると、体からは火が消えたと言っていました。周りの野宿の人が救急車呼んでくれて、病院に運び込まれたんですね。僕らはお見舞いに行つて、ご本人から話を聞きました。

その前にも近所でもう一件あったんです。朝の早朝に下半身が燃え上がった人がいた。だけどその人ははたいてたら火は消えたそうです。犯人はそれを見て、ガソリン足りないなと学習して、この四月十九日にやったんだと思います。そこで、次の夜回りで「みんな気をつけよう」というチラシを、当時五百枚ぐらい刷って撒きました。撒いたのは土曜日の夜なんだけど、その八時間後ぐらい、つまり日曜日の早朝にもっとひどいのが起こりました。七月二十九日の早朝のところ。これを讀みます。

日本橋で野宿者への放火。リヤカーで寝ている

ところへ、全身にガソリン類をかけて火をつけたらしい。現場近くで野宿している人たちに聞いたところ、朝六時ごろ、「ああー」というすごい声でびっくりして外へ出てみると、火が付いた状態でSさんが走ってきた。慌てて皆で水をぶっかけたり、布団でくるんだりして火を止めた。担当医師によると、全身三十五%の火傷、十八%は三度の火傷、救命できるかどうかというところ。これは僕が夜回りしている場所だったので、病院をつきとめて事件の二日目にお見舞いに行きました。集中治療室みたいなのに入つて話はできないんですが、顔も胸も足も全部焼けていました。それを見て、犯人は遊び半分じゃなくて、完全に殺す気でやつてるなと思いました。人間は皮膚の三分の一が焼けるとだいたい死にます。この人は三



十五%焼けたんで、危なかったんです。その後、手術を何度も繰り返してなんとか助かりました。最終的には退院できたんですが、副作用が残つて、退院したとき障害一級になりました。いまだに犯人は捕まつてません。

こういった事件はもちろん大阪だけじゃなくて、姫路では中学生と高校生がビール瓶にガソリンを詰めて火炎瓶をつくつて、姫路で野宿している片足が悪い人に投げつけて焼き殺しています。高校生はその後捕まつたんですが、捕まる直前に卒業式があつて、優等生だったらしくて卒業生代表として答辞を読んでいます。答辞の内容は「人間として思いやりの心を忘れず、凛とした姿勢で生きていくことが大事だと思います」というものだったそうです。東京でも新宿中央公園に爆発物が置かれて、それをあけた野宿の人が手足を吹き飛ばされる事件がありました。

二〇一二年十月に、大阪駅で野宿をしている人たちが襲われて、一人が殺されて、二人が病院送りになって、多くは怪我をした事件が起こりました。見ていた人の話によると、若者が深夜に突然やってきて、頭をサッカーボール蹴るみたいに全力で蹴りまくつていったといっています。

犯人は十六歳の府立高校一年生と元同級生でした。同じ中学校にいた少年グループだったんですね。これは事件直後の報道、まだ犯人が捕まつて

いない時期のものです。

(テレビ映像)

このあと犯人が捕まりました。裁判員裁判として公開されました。彼らはもともと十二人のグループで、中学生の頃から襲撃を繰り返していました。近くの川にいる野宿の人に石を投げるとか、卵を投げつけるとか。当時それが問題にならなかったのも、これはいけると思ったと彼らは言っています。当初に事件化しなかったのも段々エスカレートしたということです。

二〇一二年に彼らが高校に入ってから、襲撃が凶悪化していきます。中心人物は五人の少年だったんですが、二〇一二年の九月から新大阪での襲撃を始めます。かなり危ないもので、新大阪の階段の下で寝ていた野宿の人の頭めがけて、階段の上の方から飛んで行ってガンと踏みつけたりしているんですね。よく死ななかつたなあと思います。防犯カメラに軍手を被せて、殴る蹴るの暴行を行ったりしています。もともと彼らは大阪市内のコンビニ駐車場で夜たむろしていたんですけど、自転車で大阪駅まで三十分くらい遠征して襲撃を始めます。

特にひどかったのが十月十三日と十四日で、この結果、富松さんという方が殺されます。まず十月十三日、彼らは富松さんを発見します。この日は怪我だけで済んだんですが、富松さんは段ボー

ルかぶって寝ていた。少年Oと少年Nは頭を蹴る。それから腹に蹴りを入れる。その様子を見ていた通行人が一九番と通報をして警察がやってきます。警察が来たとき富松さんは血が混じった唾液



を垂らしていた。それから救急車が来たんですが、富松さんは「行きません、金がないから」と言っていて、救急隊員はガーンで手当てしただけで帰りません。でも、お金がないから救急病院行けないわけ

じゃなくて、生活保護適用すれば病院行けるんですよ。これは結果論ですけど、もしこのとき救急隊員や警察が富松さんを説得して病院に行っていれば、翌日殺されることはなかったはずですよ。

それから彼らは、その直後に五十八歳のUさんを襲います。Uさんはバッグを枕にしてただけで、少年Oがそのバッグを蹴ります。それから他の三人が一斉に蹴り始めます。少年Iが近くにあった土のう袋をUさんに投げつけます。二十キロ、三十キロある重いやつです。それから少年Nも、再び土のう袋をUさんに投げつけます。この結果Uさんは気絶します。Uさんの医師の診断は骨折などで入院一か月でした。

彼らは次の十四日、八十歳のHさんを襲います。少年Nが顔を蹴る、踏む、などの暴行をします。Hさんは悲鳴をあげて気絶します。少年たちは笑いながら「死んだ。マジおもしろい」と言い合います。Hさんは、脳挫傷、くも膜下出血、皮下出血なので、三週間の入院が必要と診断されます。それから彼らは七十三歳のSさんを襲います。まず「おっさん、起きるか」と怒鳴り声が聞こえ、少年Nが四回蹴ります。Sさんが「わかった、わかった」というと、少年たちは「謝れや」といい、Sさんが「すみません」というと、「すみませんでしたやる」と言っていて、暴行が続きます。少年NがSさんを二十回踏みつけます。Sさんが悲鳴を



出すと「何しゃべつとんのや」と言い、その後少年Hが二十発、拳でパンチを連発します。Sさんは顔をガードしていましたが出血しました。その後Sさんは自力で警察署に行つて、救急病院で入院します。実は彼ら自身が襲撃をスマホで撮影したので、警察が証拠として調べて襲撃の詳細がわかったんです。「なぜ動画を撮影したか」と聞かれて、彼らは「あとで見て楽しむため」と言っています。

それから午前三時ごろに彼らは富松さんを発見します。少年Oが少年Nに「こいつ、きのうのやつやん?」「そうやな」と言った後、まず殴る恰好して威嚇し、「あん、なんだよ。めっちゃ臭い」、富松さんが上半身起こします。少年Lが富松さんの上半身と顔を殴ります。富松さんは「助けて、助けて」と声をあげた。

少年Hによると、「助けて」と言ったときに富松さんが立ち上がるうとして、それから蹴られて、それから顔をガードしていた。少年Oが横たわった富松さんの頭部と背中を蹴ります。少年Oと少年NとIの三人で蹴ります。Nは、腰を十回蹴ります。この時富松さんは、段ボールを頭にかぶせて、右を下に半身の姿勢になって体を守ります。少年Iがジャンプしながら段ボールごしに頭部を十回踏みつけます。下はコンクリートなんですけども、富松さんは意識を失います。少年Oが幅跳

びの要領でジャンプして頭部を踏みつけます。この時、この彼の靴底の模様の皮下出血が富松さんの頭部に起こります。それから少年Nが支柱に手をかけて四回富松さんの頭を踏みつけます。この



時も彼の靴底の模様の皮下出血が富松さんの頭に起こります。

少年たちは、「失神してる」と言い合います。その様子を撮影していたHが、Nにかわり、Hが

四回尻を蹴ります。富松さんはこの時から軀をかきはじめます。少年Hによると、軀をかいているので、起こしてみようという話になった。少年Oは、富松さんを仰向けにして殴り、頸を踏みつけます。彼らは「死んだんちゃう?」と笑い合います。その後通行人が富松さんを発見し、一一九番通報しますが、警察官と救急車が来たときは心肺停止でした。富松さんを解剖した医師によると、「頭部に打撃が集中していた。脾臓にも損傷がある。側頭部、頭部の皮下出血、筋肉内出血、くも膜下出血。高度の脳浮腫。死因は頭部外傷によるくも膜下出血。頭部が揺れ、脳の血管が切れ、脳浮腫により脳が圧迫され、呼吸機能、循環機能が阻害されたと考えられる。小脳の出血が致命的だったと考えられる。富松さんの頭部には、少年たちの靴底の模様の皮下出血がいくつも見られた。これはかなり珍しい現象で、相応に強い打撃だったと考えられる」とあります。

殺された富松さんは、九州の出身。中学卒業後、大阪の印刷会社に勤めていました。三十歳ごろに不動産会社に勤め、その後自分で不動産会社を経営します。ただ、六十歳ごろに会社が不況の影響を受けたのか、潰れます。三年ほど前から、兄弟と連絡が取れなくなったということです。

こういった事件を起こした少年たちなんですけども、

いったいどういう子供たちなのか。実は裁判員裁判では少年たちの成育歴を辿るのにかなりの時間が費やされました。検察官が最後に言っていました、「少年たちが非常に悲惨な同情すべき環境にあったことはよくわかる。ただ、それについて、亡くなった富松さんをはじめ被害者には全くなんの責任もない」。まったくそうです。ただ、虐待を受けたり、暴行を受けた人たちが、後に自分たちが加害者になる、という暴力の連鎖という問題があり、その一つの例として、少年たちの成育歴が詳しく辿られました。中には、アルコール依存のお父さんやお兄さんから虐待を受けたり、盗みなどの問題行動があつて、児童相談所で暮らしたり、少年院に行つた少年の事例があります。親に育児放棄されたり、不登校、両親が離婚したり、不安定な家族の中で暮らしたり、いじめなどもありました。

彼らが野宿者を襲つた要因ですが、大ざっぱに言うると二つあると思います。一つが「野宿者に対する偏見」です。少年たちの一人が「野宿者は邪魔、と言うのを聞いたことある」と答えています。「汚いものを見る態度が大人にもあつた。母に仕事をしなかつたらあんな人になるんやで、と言われた」と。聞いたらそのお母さんも、自分のお母さんからそう言われていた。だから長年にわたる社会の偏見がこういつた事件の背景にあつたのは

間違いないと思います。

それからもう一つは、彼ら自身の人間関係の在り方です。彼らは、学校にも、家庭にも、地域の居場所がなくて、この仲間関係しか自分の存在価値



を確かめるところがなかったようです。本当の意味での信頼関係がなかった、と彼らは言っています。自分の本当の姿をみせると虐められるんじゃないか、関係が壊れるんじゃないかと疑心暗鬼

で、お互いにノリで合わせていって、お互いに都合のいい話しかしなかった、と少年の一人が言っていました。「彼らとは仲間関係はあるものの、自分自身は上手くいっていないと感じている。和を乱してはいけないし、空気を読まないといけない。後仲間から外れるのが怖かった。空気を読みすぎた」と言っています。

お互いにケンカしたり意見を戦わせながら、お互いに磨かれて成長していくという通常の友達関係をつくるのが彼らにはできませんでした。その背景には虐待の問題があります。表面的な仲の良さしか経験していないので、いったん暴行が始まると止めどもなくエスカレートしていくという背景があつたということです。

少年の一人が言っていたように、「何度もホームレスしびきに行こうと誘われる。それを断るとノリが悪いと言われる。ノリと言われるのはむちや嫌だった。顔が腫れるぐらいの暴行なら、ノリ悪いと言われるぐらいなら行つた方がいいと思つた」。仲間関係が、彼にとつては唯一、自分の存在価値を確かめる命綱なんです。それがなくなるぐらいならホームレスに暴行してもいいと思つていたということです。野宿者に対する偏見に加え、こうした人間関係のあり方が襲撃のメカニズムとしてあつたんだろうと思います。

少年たちの弁護団から僕に話があつて、何度か

弁護士とやりとりしています。僕が小学生向けに書いた野宿問題の本を弁護士が差し入れて、彼らはそれを読んでいます。そして、少年たちのお母さんたち何人かが弁護士と一緒に、「子ども夜回り」に参加しています。実際に子供たちと夜回りして野宿の人たちにおにぎりを配って、その経験をお母さんたちは子供たちに伝えていきます。地裁では、五年か七年の不定期刑、高裁でも同じ判決が下りました。彼らは今年少年院に行っています。高裁では反省の言葉を述べたんですけど、まだまだ本当に事件を受け止めているとは思えません。彼らは今度、刑務所に行くんですが、そこで自分が他者を傷つけてしまったことを彼らが反省できるか、疑問は残ります。

彼らの背景には貧困と虐待があります。野宿になる若者の背景には一人親家庭の貧困問題と虐待があります。彼らは自分自身が野宿者という被害者になるかもしれないし、一方で野宿者を襲っ



たり、或は女性や外国人を襲うような加害者になる可能性もあります。加害者にも被害者にもなる危うい状態にいます。

こういった事件が起こると「ホームレスはどこかシェルター入れちゃえ」とか「子供は夜散歩させるな」とか言われたりします。そうやって隔離すれば、確かに問題は起こりませんが、本質的には解決しません。野宿者襲撃は、ある意味で野宿者と子どもたちの最悪の形の出会いと言えます。それは隔離することで解決するのではなく、むしろ逆に、野宿者と子供たちとの意味のある出会いをつくることによって解決すべきではないかと思えます。

釜ヶ崎では、子どもたち自身がおにぎりを作って夜回りに行つて、学習を行う「子供夜回り」を行つています。これが釜ヶ崎の「こどもの里」の子ども夜回りの様子です。

(『ホームレスと出会う子どもたち』映像)

この「こどもの里」は学童保育施設なんだけど、ファミリーホームをしていて、虐待を受けていたり、家庭の事情で親と一緒に暮らせない子どもたちも住んでいます。先ほど野宿者を襲った少年たちの話をしましたが、家庭環境から言うと彼らによく似た子供たちが「こどもの里」にもいて、そういう子供たちが野宿の人たちと接しています。こういった形でお互いのことを知ることが出来れ

ば、野宿者襲撃はある程度阻止できるんじゃないかと思えます。

日本の貧困問題については改善の兆しがなく、襲撃問題についても、子供たちに対する取り組みが進まない中、どこまで問題が解決するか見えないところがあります。先ほど言ったように、貧困と虐待をどう止めるかということが大きな鍵の一つになるんじゃないかと思っています。こういった問題を皆さんと一緒に解決するために何ができるか、ヒントを出すために何らかの資料を出すために今日はここに来ました。みなさん、では、長い時間有難うございました。

#### 【略歴】

1964年6月生まれ。同志社大学在学中から釜ヶ崎の日雇労働者・野宿者支援活動に関わる。2000年、「つき合わせの器は、ナイフで切られた果物となりえるか？」で群像新人文賞評論部門優秀賞。2001年から各地の小、中、高校などで「野宿問題の授業」を行なう。野宿者ネットワーク代表。社団法人「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」代表理事。「フリーターズフリー」編集発行人。著書に『へ野宿者襲撃論』人文書院、『ルポ 最底辺 不安定就労と野宿』ちくま新書、『貧困を考えよう』若波ジュニア新書、『おっちゃん、なんで外で寝なあかんの？』こども夜回りと「ホームレスの人たち」(あかね書房)など。

# 事務局からのお知らせ

## 1. 「シャッター以前」6号発刊

「シャッター以前」6号を皆様にお届けしてから三ヵ月が過ぎましたがご覧いただけましたでしょうか？「内容が量・質ともに密で読み応えがあった」と嬉しい感想をお寄せくださった方もありました。

多くの皆様が本代並びに通信費、更にカンパをご送金くださり、印刷所への支払いも無事済ませることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

## 2. 会報や案内等が不要な方

今回、ここ数年間、会とコンタクトがなかった方（通信費の送付、AKIHIKOの会への出席、「シャッター以前」などの購読申込みなどない方）に返信はがきを同封しました。岡村没後三十年を経て、もう会報の送付や案内・連絡など不要な方もいらっしゃると思います。引き続き「送付を希望の方」のみ、同封の返信用ハガキを投函してください。会宛のメールでも結構です。ハガキが同封されていなかった方には、これまで通り会報や案内などを送らせていただきます。もしハガキ同封のなかった方でも、今後連絡などが不要な方は「一報いただけると幸いです」。

## 3. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

二〇一四年までの分は「シャッター以前」6号に掲載しましたので、今回は割愛いたします。岡村昭彦の写真展―生きることに死ぬこと―のすべての関連新聞記事&岡村昭彦関連著書・記事などについてはホームページの「没後のアキヒコ・オカムラ」に掲載されておりますので「ご覧ください」。

## 4. 「夏期ゼミ」(2015)のお知らせ

AKIHIKOの会世話人米沢慧氏主宰による夏期ゼミ(2015)は、静岡県立大学附属図書館岡村昭彦文庫と左記のテーマで共同開催いたします。

鼎談…ホスピスは運動である―いのちの受けとめ手になること 山崎章郎 ニノ坂保喜 米沢慧  
日 時…七月二十五日(土) 14時～17時  
会 場…静岡県立大学附属図書館岡村昭彦文庫  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田52-1  
資料代…500円(但し学生は無料)。  
\* 終了後の懇親会費は別途5000円  
申込み…七月二十三日(木)  
申込先…①AKIHIKOの会事務局 ②静岡県立大学比留間研究室(054-264-15364) ③米沢慧(03-3970-5507)まで。

日本のホスピス運動をリードしてきた臨床医と長寿時代の命の受けとめ方、スピリチュアルケアなど、切実なテーマを三時間たっぷり討議します。関心のある方はどなたでも参加できます。当日の直接参加も歓迎します。

## 5. ヴェトナム戦争からホスピスまで『岡村昭彦の写真in函館』―われわれは、どんな時代に生きているのか―

開催日時 2015年9月18日(金)～9月25日(金)  
開催場所 函館市地域交流まちづくりセンター 1階  
情報発信フロア(040-0553 函館市末広町4-19 電話  
0138-22-9700 FAX 0138-22-9800)

開館時間 AM9:00～PM9:00 入場無料  
主催：岡村昭彦写真展はこだて実行委員会(代表：佐藤純子、事務局：栄文堂内)、後援：函館市・教育委員会

## 6. 第31回「AKIHIKOの会」案内

(2016年3月27日「日」大阪で開催)  
第30回AKIHIKOの会の懇親会席上、関西在住の世話人横山巖氏より「来年はぜひ関西での開催を！」と提案があり、参加者の皆さまから「賛同いただきました。ドキュメンタリー映像制作(映画監督)刀川和也氏を講師として予定しています。まだ先のことですが東京開催で出席できない方々のご参加を期待しています」。

## 『岡村昭彦の会 会報』第25号(2015.7.10)

発行 東京都江戸川区西小岩五十一―二十七  
戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局  
TEL&FAX 03-3657-8380  
口座番号「001700-6-615123」  
加入者名「岡村昭彦の会」

\*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp